

世界資本主義フォーラム  
連続講座『資本論』と現代世界第6回

- 2022年9月24日(土) 13時30分—16時30分
- 講師 伊藤誠
- テーマ 自然環境問題とマルクス理論

**エコロジカル社会主義の意義 伊藤誠**

—いいだもも、R・ポーリン、J・フォースター、斎藤幸平との協力—

**(1) エコロジカルな危機の深化**

この夏も六月にはやくも梅雨があけて、とたんに酷暑。台風がやつぎばやに訪れ、異常な雨量をとめない大洪水が各地に被害を生じている。過疎化した山林が荒廃しているためか、そのつど各地で山が崩れ大量の土砂と流木が家屋、道路、田畑に被害を広げ、復旧にも困難を増している。

地球温暖化によるエコロジカルな危機の深化を憂慮せざるをえない。日本だけではない。異常な酷暑、降雨、洪水が毎年のように世界各地のニュースとして報じられ続けている。四年ほど前になるか、インドのケララ州コーチ市で資本論出版一五〇周年を記念する国際研究集会がマルクス派の市長の肩入れで企画され、世界各国からマルクス理論家の友人たちも集まる予定となり、九月の日程にあわせ航空券も用意してたのしみにしていたところ、とつぜんの大洪水で中止となってしまった。大規模な被害にあった人びとに深く同情しながら、こうした異常気象が世界で日常化していることも実感した。北極海の氷山の溶融が海面をおしあげて、多くの地域とそこでの住民が水没する危険もせまっているともいわれる。

気象庁の資料によれば、地球の上の気温は1880年からの一世紀には〇・八度の上昇にとどまっていたが、二〇世紀末以降加速的に大きく上昇をしてきている。にもかかわらず、温暖化ガスを減少させようとする国際協力は、ことに新自由主義のもとでは実現が困難とされてきた。周知のように1997年の国連の京都議定書がその達成にゆきづまり、2015年の気候変動枠組条約第二回会合(COP21)では今世紀中の地球温暖化を二度以内とする合意があらためて再確認され、さらにそれを一・五度以下にする努力目標も追加された。

こうした目標にむけて、各国が国際的に協力し、風力、ソーラーなどのソフトエネルギー開発につとめ地域社会からのグリーンリカバリー戦略を促進することが求められている。とはいえ、各国ごとの温暖化ガス削減の交渉やその実現は、途上諸国から温暖化ガス排出権を買い取る交渉もふくめ容易にすすんでいない。その結果、現実にはメガトン・ギャップといわれる三〜四度におよぶ気温上昇が今世紀にさけられないとの予測もある。にもかかわらず、各国の政策努力は、その根本問題を回避して、むしろ温暖化のリスクや打撃に対応する方策に移行しつつあることが懸念されている(古沢、2016)。日本にもその傾向がないか。

こうした状況を背景に、経団連などからも原発は地球温暖化ガスを出さないのその削

減戦略に資する、という主張も再浮上しつつある。しかし、2011年の東日本大震災のおりに原発の過酷事故が福島を自然環境を広範に破壊したリスク、使用済み核燃料の後処理の（たとえば汚染水の海洋投棄のような）自然環境に与え続けている大きな負担を考慮すると、脱原発路線こそ未来に向かい自然環境を大切にしてくるうえで欠かせない方針ではないか。福島原発事故を契機にドイツをはじめ脱原発の基本方針を国民投票などで決定した有力な国も少なくない。

『資本論』にもとづき現代世界の資本主義を自然視する新古典派経済学の狭い視野と対峙して、歴史社会としての資本主義の発展とその内的矛盾の現代的発現に批判的考察を総合的にすすめるようとする社会科学としての経済学では、こうしたエコロジカルな危機にもより適切な分析をすすめる、それをのりこえる広義の(社会民主主義をふくむ)社会主義の現代的可能性にも道を開くことができるのではなかろうか。

こうした問題関心につよく惹かれるようになったのは1970年代後半からのいいだもとの協力、交友関係によるところが大きい。最初に引き合わせてくれたのは日高普さんで、鶴沼のいいだ邸訪問に誘ってくれた。広い居間兼用の仕事部屋の大きなデスクの後ろの大きな書棚の目につくところに出版後間もない拙著『信用と恐慌』(1973)がさりげなくおいてあってうれしかった。いいださんの若いころからの詩人、小説家、マルクス理論家、思想家、社会運動家としての輝かしく多彩な才能と作品に魅力をおぼえていたためでもある。

その後1978年に半年、ニューヨーク大学とニュースクール・フォー・ソシアルリサーチの大学院で講義し帰国した直後に電話で新橋駅近くの喫茶店によびだされた。いま日本でも批判的知性の結集が望まれる。いろいろな研究分野で努力を重ねておられる方々を広く集め、世界と日本の現状に批判的検討をともにすすめる、その考察の基礎としてのマルクスの思想と理論の現代的再生への志も交流させつつ、その一環として季刊誌も発刊したい。協力しませんかという提案であった。そのための出版社や資金のあてはあるのか、編集員にはどのような方を誘うのか、といったことをいくつかきいた。が、まだなにもない、最初に声をかけているのだから、すべてこれからだ、とのことであった。

一朝一夕で実現できるとは思えない企画なので、どうなるか多少心細く感じていた。ところがわずか半年ほどのうちに社会評論社と話をまとめ、編集委員にも各分野一流のかたを集め季刊誌の発刊とそれをめぐる連帯交流の組織を立ちあげるにいたる。その手ぎわの良さは、シルクハットから鳩をとりだす手品のように、あきれつつ感心するばかりであった。こうして『季刊クライシス』が1979年に誕生した。誌名は森田桐郎さんの提案で、もともと重篤な病が死に至るか回復に向かうかの岐路を意味していた古代ギリシャ以来のクライシスという用語が、世界と日本の危機=岐路の批判的解明にむかう協同作業にふさわしいと一同が納得した。

この雑誌を基礎とする研究交流の運動のなかでいいださんが重視していた分野のひとつが高木仁三郎、柴谷篤弘、中山茂の諸氏をリーダー格とする科学技術批判の領域であった。資本主義の発達に促された科学と技術の発展は、人間とエコロジカルな自然環境に荒廃化

をもたらすリスクも増大させてきてはいないか。遺伝子工学についての柴谷さんの憂慮や原発などの核技術の危険についての高木さんの研究、化石燃料多消費型産業構造による地球温暖化問題についての中山さんの批判的見解など、いずれも啓発されるところが少なくなかった。そこで日本でも赤と緑の合流がぜひ必要だということになり、いいださんの発案で集会やデモにも持って行ける『季刊クライシス』の赤と緑の旗をつくったりしていた。

その間、1983年のマルクス没後一〇〇年の記念特集『季刊クライシス』14号は一〇指にあまるその年の各誌のマルクス特集のさきがけとなりほぼ完売した。同時にマルクス・センテニアル連続討論集会も、講師一〇名の協力のもとに三度にわたり延べ五〇〇名の参加者をえて、活気あふれる集会となった。その締めくくりとした九段会館でのマルクス没後一〇〇年の記念集会は加藤周一さんと都留重人さんがこころよく講演をしてくださって、これも満員の大集会となった。

この年に、私が講師となって『資本論』読書会も『季刊クライシス』の九段下の事務所ではじめた。定員四〇名の予定にその倍の参加者があり、急遽二つの班に分けて進行させることとなり、たしか三年くらいで全三巻をぐいっしょに読みとおした。いいださんも全会出席し、参加者のなかにはその後立派な研究書を書かれた方もいて質疑もたのしめた。

『季刊クライシス』の一〇年の後も、続いて『月刊フォーラム』、『アソシエ』、『変革のアソシエ』と各一〇年、あわせて四〇年雑誌の企画、編集、研究、討論集会、関連した書籍の企画や共編などいいださんとの親交が続いた。まれに見る博覧強記、あふれる文才、広い分野にわたる高い水準での知的活力、まさに鬼才といえるいいださんがいると、どの会合も知的サロンのおもむきをおびた。2011年3月に逝去されたが、その志を忘れることはできない。マルクスの思想と理論を現代に活かし、エコロジカルな自然環境と人間の荒廃の危機を批判的に解明し、それをのりこえる現代的方法をさらに探ってゆきたい。

## (2) グリーンリカバリー戦略

地球温暖化のもたらす広範な気象変動の危機にどのような対策が必要とされているか。市場原理主義による新自由主義のもとで、社会的規制から競争的企業の利潤追求活動を解放する傾向のもとでは、金融の肥大化と投機的バブルとその崩壊の打撃に関心が集められ、エコロジカルな自然環境の荒廃の危機に政策的配慮が向けられることがほとんどなかった。

しかし、新自由主義的市場原理主義と金融化を世界的に推進し続けたアメリカ資本主義の内部に、2007～08年のサブプライム恐慌が自己崩壊的に生じ、その打撃が1929年以降の大恐慌を想起させる世界恐慌に拡大深化するなかで、政策潮流に大きな変化が生ずる。2009年に誕生したB・オバマ大統領のもとで、ニュー・ニューディールといわれる一連の社会民主主義的政策が経済生活の安定化政策として試みられ、新たな国民健康保険制度とともに、グリーンリカバリー戦略といわれる構想が、重要な政策方針とされたからである。この戦略構想はかつてのニューディールにもみられないまさに現代的経済回復政策といえる。その重要な支えとなったのが、マサセチューツ大学アマーフト校政治経済研

究所でR・ポーリンら (Pollin, et al., 2008) がとりまとめた報告書であった。

その報告書によると、二酸化炭素(CO<sup>2</sup>)の排出を削減し、持続可能な経済生活の基礎としての自然環境を次の世代に残してゆかなければならない。エネルギー節約の観点からも地産地消的流通・生活への再編をすすめ、ソフトエネルギーパスとしての多様なエネルギー源の開発を促進すべきである。多元的に供給される電力のスマートグリッドによる流通網も整備しなければならない。地域ごとの公共建物からはじめて、ビルや住まいのエネルギー効率改善にむけた二重ガラス窓への改装への公的支援も求められる。個人乗用車の利用を削減するために公共交通再拡充も必要とされる。このような産業政策によれば、同じ金額でも、従来型の公共事業への財政支出にくらべ、多様で大きな雇用が期待できる。そのことは、実際の統計数値にもとづく経済モデルでの試算によっても確かめられる。

こうしたグリーンリカバリー戦略の構想は、同じ年に日本にも誕生した民主党政権のもとでのエコポイント制にも影響を与えていた。もっともエコポイント制は短期の経済回復策に重点をおき、グリーンリカバリー戦略構想にくらべ、産業政策としての長期的で規模の大きい体系的な理論と分析にもとづいていたとは思えない。同時に試みられた子ども手当とともに、エコポイント制も多くの人びとに支持されて、翌2010年にかけて、2008年の実質経済成長率マイナス3.7%からプラス3.4%へ、7.1%幅での景気回復に貢献はしていたが、経済危機鎮静とともに時限立法として更新されず、子ども手当もおし戻されている。

日本の野党も与党に対抗する共闘をすすめるさいに、その政策方針の基礎に、政治経済学の理論と分析をどのように活かしてゆけるか、研究者との協力関係をどのように活かしてゆけるか、政治経済学の研究者の側にもそれにどのように応じてゆけるか。エコロジカルな自然環境の危機の問題に絞ってみても、欧米諸国での事例にくらべ、現代の日本では学者と政治家のあいだに距離感が大きいのではなからうか。

オバマ政権のためにグリーンリカバリー戦略の構想をとりまとめたR・ポーリンには、2019年のフランス、リール市での政治経済学国際コンファレンスでひさしぶりに再会した。会場がわかりにくく建物のそとで迷っていたら、声をかけてくれたのである。こちらは覚えていなかったのであるが、ニュースクール・フォー・ソシアルリサーチの大学院での1978年の講義に出ていましたとのことで、そういわれれば当時の若い面影も想起されてうれしくなった。グリーンリカバリー戦略の報告書は読んで重要な提言と思った。地産地消のソフトエネルギー開発の構想など賛同していると述べた。ポーリンはよろこんでくれたが、国際協力を、二酸化炭素の地下固定化など大規模な気象対策の企画や構想もふくめ、並行してすすめたいとも述べていた。

オバマ政権からバイデン政権へニュー・ニューディールの社会民主主義的構想がひきつがれ、グリーンリカバリー戦略も大切にされていることは、トランプ政権が国家主義的アメリカファーストの観点でCOP21でのパリ協定から一方的に脱退した方針を、バイデン政権が発足と同時に是正し取り消したことでもわかる。とはいえ、大学教育の個人負担の軽減、

無償化やグリーンリカバリー戦略など、サンダース派をはじめ若者世代が強く期待していたニュー・ニューディール政策はその後あまりはかばかしく進捗していない。若者世代には失望感も広がっている。

ひとつにはかつてのニューディール政策においてその支持基盤強化の観点からも重要な柱とされていたワグナー法による労働組合の結成と交渉権の保障のような、労働者の相互扶助、連帯運動の現代的な多様な試みや組織活動への政策的保護や支援の政策が、オバマ政権以来のニュー・ニューディールには不足しているのではなかろうか。加えてバイデン政権にはウクライナ戦争に停戦、平和をもたらす国連中心での外交努力が不足していないか。発端のNATOの東方拡大を容認し、ウクライナへの軍事支援、ロシアへの経済制裁のみで、トランプ政権以降の対中強硬路線も容易に緩和しえず、中国を巻き込んでの和平への国際協調や国際世論形成にあまりとりくんでいない。その点では安倍政権から菅政権を経て岸田内閣にいたる日本の外交姿勢もアメリカの要請に応じ、沖縄の辺野古基地建設を地元住民の強い反対を押し切り強行し、さらに南西諸島(琉球弧)へのミサイル基地配備もすすめつつ、従前のシーリングをはるかにこえる防衛費の増強を続け、平和憲法を活かした国際的役割を果たしているとはとてもいえない。

こうした戦争の継続やそれにとまなう軍事的国際緊張の強化は、アメリカ産業にとって国際的にいまなお卓越した競争力を保持している軍事産業をめぐる産軍複合体制の利害には望ましいにちがいないが、世界の若者世代が深く憂慮し是正を望んでいる、エコロジカルな自然環境の破壊的荒廃を直接間接にいつそう促進することとなる。グリーンリカバリー戦略にあてるべき公的資金を大きく制約する作用も大きい。そのような戦争の犠牲や費用とその反エコロジー作用との相反関係に統計数理的分析がすすめられるならば、反戦平和運動とエコロジー運動との双方にともに資するところの大きい研究となるにちがいない。どこかですでにそのような分析もすすめられている可能性もある。気づかれた方は教えていただきたい。

### (3) エコロジカルマルクス派との協力

エコロジストのなかには、マルクスの思想と理論の根底に自然環境の制約は、科学技術の進歩にとまなう生産力の発展により、一時的にはともかく結局は克服され解決されてゆくものとみなす、プロメテウス主義がおかれていて、唯物史観の定式にもそれが読みとれるのではないかと解釈し、その観点からマルクス学派にはエコロジカルな危機へのとりくみに方法論上の制約ないし不備があるのではないかと批判する傾向がみられた。その批判は、マルクス主義を代表しているとみなされていたソ連型社会主義の偏った生産力主義やそれにもとづく重工業化がもたらしたバイカル湖の大汚染による鳥も鳴かない沈黙の春、あるいはチェルノブイリ原発事故(1986)などのような大規模な自然環境破壊へのソ連マルクス派の無反省な接し方にも裏づけられていたように思える。

とはいえ、ソ連マルクス派に批判的に対峙してきた世界と日本のマルクス学派のなかか

らは、『資本論』に結集されるマルクスの豊かで深い思索にこそ、むしろ現代世界のエコロジカルな危機の考察の基礎として大切に役立てるべき理論と分析が読みとれることをあきらかにし、その現代的適用をすすめるエコロジカルマルクス派としての研究も積み重ねられてきている。

日本でいいだももをはじめとする仲間とともに『季刊クライシス』で、われわれが現代的なエコロジカルな危機にソ連型マルクス主義とは異なる観点から、新たなマルクス学派としての批判的検討をすすめていたところに、アメリカでもエコロジカルマルクス派の新たな試みが推進されていた。その代表的理論家のひとりがJ・B・フォスター（1953—）であった。カナダのヨーク大学の大学院で学び、アメリカにもどりオレゴン大学で教職についた若いころからP・スウィージーに協力し、『マンスリー・レビュー』の編集者となるとともに、著書 *Marx's Ecology: materialism and nature* (2000) に結集される一連の論稿において、マルクスの著作や草稿を丹念に研究し、資本主義の発展が人間と自然とともに荒廃化をもたらすことにいかにマルクスの考察が深められていったかをあきらかにしている。

たとえば、『資本論』の第一巻第一〇章「機械と大工業」の第一〇節「大工業と農業」では、まず耕地の拡大に制約があるかぎり、農業での機械の使用による生産性の上昇は、農業労働者の過剰化に強く作用することが指摘される。ついで、リービッツの農学研究などにもとづき、「資本主義的生産は、それによって大中心地に集積される都市人口がますます優勢になるにつれて、一方では社会の歴史的動力を集積するが、他方では人間と土地とのあいだの物質代謝を攪乱する。すなわち、人間が食料や衣料の形で消費する土壌成分が土地に返ることを、つまり土壌の豊饒性の持続の永久的自然条件を、攪乱する。したがってまた同時に、それは都市労働者の肉体的健康をも農村労働者の精神生活をも破壊する。」（邦訳②四六五ページ）と述べている。資本主義のもとでの工業と農業、都市と農村の社会的分化、分業が、人間と土地のあいだの物質代謝関係を破壊し、土地の豊饒性を失わせ、都市と農村の労働者に肉体的、精神的健康障害をもたらす傾向に深い憂慮を示しているのである。

フォスターは、こうしたマルクスの考察を、1980年代以降、協力して検討を加えてきたロードアイランド大学教授のP・バーケット（2014）とともに、「物質代謝の亀裂(rift)」論と規定するとともに、そこに現代のグローバルな環境危機の批判的解明にとっても、重要な分析の基準が提示されているとみている。それははからずも日本で『季刊クライシス』などでわれわれが推進しようとしていた企図と重なりあい共鳴していた。

2018年の春に、それまで直接の接触のおりがなかったフォスターから懇切なメールがとどいた。ある出版社から拙著 *Value and Crisis* (1980) の補充再版の希望がよせられ、初版出版元のマンスリーレビュー (MR) 社に他社で再版を企画することに異論がないか確かめてほしいといわれ、問い合わせたさいに、懇切な返信をくれたのである。

そこでは、ほぼつぎのような主旨が述べられていた。スウィージーやマグドフの後を継いだMRの編集者のなかでもあなたを大切に思っている人が多い。この *Value and Crisis* はいまや古典的な作品で、自分の知的発達にも大きな役割を果たしてくれた。当時までのマルク

ス恐慌論についての最良の著書のひとつといえる。その拡充再版の企画はよろこばしい。もしMRにもその出版の可能性があるならその内容案とあわせ歓迎したい。

この返信での要請には志をともにする研究者仲間として断わりにくい感があった。そこで、補充を考えていた論文からの選択の相談にもフォスターにのってもらい、初版からちょうど四〇年の2020年に再版がMRから出版された。初版は英語版からフランス語、オランダ語、韓国語、中国語にも翻訳されていたが、日本語版はなかった。再版は日本語版も出版しておきたいと考えている。

こうした研究上の協力、交流がフォスターとのあいだにすすんでいた時期に、斎藤幸平氏が、フォスターとバーケットのマルクス派エコロジストとしての研究を継承しつつ深化、拡充して、ドイツでフンボルト大学に提出した博士論文の英語版 *Marx's Ecosocialism* (2017) をMRから出版し、それによって二〇一八年に日本人初、史上最年少でのアイザック・ドイッチャー賞を受賞する過程も進行していた。この著書の日本語版が『大洪水の前に—マルクスと惑星の物質代謝—』(2019)である。

その前後からおつきあいはじまり、この日本語版については経済学史学会からの依頼で『経済学史研究』(62-2)にこの日本語版への書評(2021)も書いている。そこで述べたように、この著作で斎藤氏はマルクスのエコロジー論の形成、深化の全過程を、最近のマルクス・エンゲルス大全集(MEGA)により、マルクスの草稿や抜粋ノートまで丹念に検討し、とくに『資本論』以降の晩年のノートから、リービッチと対立していたC・フラスによる古代都市の周辺森林伐採による砂漠化による気象危機論へのマルクスの関心の深化に、現代につうずる大規模なエコロジカルな自然環境破壊に通底する批判的考察が読みとれることを発見している。その研究成果を高く評価しつつ、つぎのような課題も指摘しておいた。

まず、学説史のうえで、リカードやマルサスの人口法則論や土地の収穫逓減の自然法則に對峙し、それらを批判的にのりこえていたマルクスの思想と理論の全体の枠組みとの関連のなかで、そのようなマルクスのエコロジカルな危機論がどのように体系的に再整理され位置づけられることになるのか。さらに、本書が関心をよせている哲学、思想史、自然諸科学へのマルクスの広く深い考究を継承しつつ、資本主義の世界史的発展段階や現状分析の研究次元において、資本主義の発展変化にともなう、自然との物質代謝の素材の内容における亀裂や自然破壊の危機が、公害やエコロジカルな危機としてどのような具体的様相の変化をとめない、資本主義自体の危機として展開されてきたか。広く協力してともにさらに追究すべき重要な具体的研究課題が残されていることも示唆されているのではなかろうか。

この著書をもとにポピュラーな筆致でまとめた『人新世の『資本論』』(2020)は四〇万部をこえるベストセラーとなり、マルクス経済学にひさびさに日本の読者、世論を大きくひきよせる役割を果たしてくれている。2022年には斎藤氏は大阪市立大学から東京大学に移り、協力もいっそう容易となったように思われ、よろこんでいる。

そのエコロジカルな危機論は、その克服の方途として、脱成長コミュニズムを標榜し、労働者協同組合の成長、市民の地域社会における自発的ソフトエネルギー開発、富の共同管理

の拡大をつうずる資本主義の止揚を重視している点でも現代的で賛同できるところが少ない。とはいえ、そのさいポーリンらがその可能性を重視している、ニュー・ニューディールの社会民主主義的代替路線の重要な内容とされているグリーンリカバリー戦略は、人民のアヘンとして拒否されるべきか、あるいは日本での野党共闘にとっても重要な柱のひとつとして、新たな Kommunismus にいたるステップになりうるのか。この点もおそらくは現状分析としての現代資本主義の多重危機の重要な一環としてのコロジカルな危機のさらに具体的解明をすすめるなかで、ともに協力して検討してゆきたい大切な問題のひとつではないかと思っている。

## 参考文献

- いいだもさんを偲ぶ会編、2012、『鬼才いいだもも』論創社。
- 伊藤誠、1973、『信用と恐慌』東京大学出版。
- 斎藤幸平、2019、『大洪水の前に—マルクスと惑星の物質代謝—』堀之内出版。
- 斎藤幸平、2020、『人新世の『資本論』』集英社新書。
- 古沢広祐、2016、「エコロジー危機と現代社会」唯物論研究協会編『文化が紡ぐ抵抗／抵抗が鍛える文化』大月書店。
- Burkett, P. 1999, *Marx and Nature*: Haymarket Books.
- Foster, J. B. 2000, *Marx's Ecology: Materialism and Nature*, Monthly Review Press. 渡辺景子訳『マルクスのエコロジー』こぶし書房(2004)
- Itoh, M, 1980, 2020, *Value and Crisis*, Monthly Review Press.
- Mark, K. (1867,1885, 1894), *Das Kapital*, Band I,II,III, in *Marx-Engels Werke*, Bd.23,24,25. 岡崎次郎訳『資本論』①~⑨ 国民文庫(1972)。
- Pollin, R., H. Garret-Peltier, J., Heintz and H. Sharber, 2008, *Green Recovery: A Program to Create Good Jobs and Start Building a Low-Carbon Economy*. Amherst: PERI.

(いとう まこと)

●参考 書評:斎藤幸平著『大洪水の前に—マルクスと惑星の物質代謝—』堀之内出版、2019年。

### 1.マルクスエコロジー論の新展開

本書は、マルクスのエコロジー論の体系的再考察にあてられている。著者が27歳でしあげてフンボルト大学に提出した博士論文(ドイツ語版)とその英語版(2017)をもとに、日本の読者向けに書き直した充実した著作である。国際的にも高く評価され、2018年のドイツチャー賞を最年少で受賞している。その内容は3部7章から構成されている。

第1部「経済学批判とエコロジー」は、エコロジー論が、マルクスによる経済学批判の体

系的発展の全過程をつらぬく重要な研究テーマの一面をなしていたことを、初期の論稿から読みとり確認しようとしている。まず第1章では、『経哲草稿』をふくむ『パリ・ノート』(1844)での労働の多様な疎外論が、土地に代表される自然からの私有制による疎外を前提としていることに、マルクスの認識が深められてゆくことが強調されている。ついで第2章では、マルクスの自然と人間の疎外関係の批判的考察が、1850年代にR・ダニエルスやJ・リービッヒらの生理学や農芸化学の研究をふまえ、自然と人間の物質代謝の歴史的变化とその攪乱の検討に展開されてゆくことが示されている。

第2部『『資本論』と物質代謝の亀裂』では、人間の自然との物質代謝を媒介する労働過程が、資本の価値増殖運動のもとで、労働力と自然の荒廃化をもたらし、持続可能な人間的発展の物質的条件を切り崩してゆく側面にマルクスが考察を深めていたことをあきらかにしている(第3章)。ことに都市と農村との対立にもとづく土壌成分の回帰をもなわない流出による物質代謝の破壊(『資本論』第1巻第13章10節)、その世界大での資源や地力への破壊作用の波及(第1巻第8章2節)、社会的物質代謝と自然的物質代謝との亀裂(第3巻第47章末)などの指摘が、リービッヒの影響をふくめ重視されている(第4章)。

第3部「晩期マルクスの物質代謝論へ」では、『資本論』第1巻出版(1867)後のマルクスの抜粋ノートの検討をつうじ、晩年のマルクスがエコロジー論をさらに拡充する作業をすすめていたことがあきらかにされる。とくに鉬物肥料ないし化学肥料に期待していたリービッヒにたいし、風化、沖積、灌漑、降雨などの自然作用による地力保存の可能性とそれを活かした人工沖積の効果を強調していたC・フラスの見解への注目によりマルクスのエコロジー論に気候変動への問題関心が新たに切り開かれていたとされる(第5章)。

そのようなマルクスのエコロジカルな問題関心は利潤率の傾向的低下の法則についても資本が、労働力と自然の弾力性に依存して、みずからの活力を再生させつつ、フラスが重視していたような森林伐採による気候変動の反作用により危機をまねき、エコ社会主義につうずる視座を内包していたとみなされる(第6章)。自然現象に唯物論的弁証法を一般化しようとして試みていたエンゲルスとマルクスの物質代謝の亀裂論とには問題意識の違いもあった(第7章)。マルクスエコロジー論の独自の意義を問い直すべき時期だとされるのである。

## 2. 経済学史研究への貢献と現代的意義

経済学史研究のうえで、本書はマルクスのエコロジー論を包括的に位置づける試みを大きく前進させる貢献を果たしている。そこはつぎのような三つの特徴が示されている。

第1に、マルクスのエコロジー論の形成・深化の全過程が、草稿や抜粋ノートをふくめ、最近のマルクス・エンゲルス大全集(MEGA)によって、新たな水準で解明されている。それによって、ことにリービッヒと対立するフラスの気候変動論へのマルクスの関心の拡充も、現代的意義をもって発見されるにいたる。その反面で、全巻をつうじMEGA版のみにマルクスからの引用が統一されているため、『資本論』をはじめ当該箇所を手元の版本で確かめたい読者には手間がかかるおそれもあり、この点はおりをみて補充を望みたい。

第2に、マルクスの人間と自然の物質代謝の亀裂論は、学説史上、マルサスとリカードへの批判的見解の進展としての意義をもっていたことも、本書をつうじあらためて提起されている重要な論点である。土地に代表される自然の制約による収穫逓減の法則に、リービッヒやフラスの見解もふまえ、マルクスは理論的に結局どう応えようとしていたか。マルクスは、生産力の上昇により自然制約が解除されてゆくとみるプロメテウス主義ではないかとする一部のエコロジストのマルクス解釈が正しくないことは、本書が適切に説きあかしているところである。しかし、そこから学説史研究のうえで、マルサス、リカード、マルクスの人口法則論と自然制約をめぐる思想と理論の対峙関係がどのように再整理されることになるか、多面的で奥の深い課題があらためて提起されているのではなかろうか。

第3に、本書は経済学史研究のうえでも、学際的な哲学、思想史、自然諸科学へのマルクスの広い関心を継承し、とくに資本主義経済のもとでの自然との物質代謝の素材的内容に深い関心をよせて考察をすすめる特質を示している。この点も今後の研究に示唆するところが大きい。とくに宇野理論における資本主義の世界史的発展段階論や現代資本主義分析にとっても、支配的産業の変化にともなう技術的、生態学的物質代謝の素材的内容の変容が、そこに生ずる公害やエコロジカルな亀裂の危機的拡大にいかにかかわるか、重要な具体的研究課題が示唆されているといえるであろう。

ふりかえってみると、マルクスは主著『資本論』において、資本主義の内的矛盾の集約的発現として周期的恐慌の原理的解明を重視していた。レーニンも資本主義の矛盾が帝国主義的列強の対立に転化され世界戦争の危機を生ずることに段階論的考察をすすめた。本書は、資本蓄積による経済危機から環境危機へ力点を移さなければならない(288 ページ)ともみている。われわれは、先進諸国の長期不況的衰退基調のなかで戦間期の大恐慌以来といわれるサブプラム恐慌(2008)を経験し、ついで東日本大震災(2011)、地球温暖化の深刻化と大洪水の多発、新型コロナ危機と一連の「自然災害」にも悩まされている。それらの多重危機の差異と相互関連とをどのように体系的に理解し、未来にたちむかうべきか。経済学史研究のうえで欠かせないマルクスの思想と理論の意義をめぐる本書の貢献を尊重しつつ、経済危機と環境危機との関連をふくめ現代資本主義に深まる多重危機の構造と歴的意義の解明と、それらの克服への道筋をさぐる作業をさらに協力してすすめたい。

(伊藤 誠 東京大学名誉教授)